児童図書館の現状と諸問題

その1　子どもの意識調査を中心として

高　橋　裕　子*

The Present Situation of Public Library Services for Children and their Problems Awaiting Solution.

Yūko Takahashi

〔内容抄録〕 子どもに図書を供給する組織・機関は，現在さまざまの形で質・量共にその発展を見せている。すなわち，学校図書館をはじめとして，公共の児童図書館と一般図書館に併設された児童図書室，児童館の図書室や地域文庫・家庭文庫等が，それぞれの立場で，子どもに本とのふれ合いの場を提供している。この中で，公的な児童図書館（室）の役割は，その公共性，専門性と財源の面で，重要なものといわねばならない。

私は，この公共児童図書館の現状を把握し，それらがかかえるさまざまの問題をできるだけ微視的な立場からとらえ，そのあるべき姿を追求しようと考える。

本研究は，その一歩として，東京・千葉・岩手の3地域，5館で行なった子供の意識調査の結果から論ずべき問題点を探ろうとするものである。この中から図書館に来る子どもたちが，何をきっかけとして何を求めているかが明らかとなった。又，各図書館の比較から，図書館側の姿勢と，子ども達の利用意識とには深い関連性のあることが指摘された。

緒　言

今までの図書館は，古びた館の中に，カビくさい古い書物がならび，一部の学者が研究に必要な文献を調べるための場所であったり，また一方では，受験生のための静かな勉強の場であると考えられていた。

しかし，今日の情報社会にあって，人々は，その情報センターとしての役割を図書館に求めはじめた。人々が求める本，新聞，雑誌，そしてレコードなどをいかに市民に能率よく供給するか，というサービス機関としての性格を帯びはじめている。つまり，「空間一場」としての図書館から「システム」としての図書館へ移行しつつあると言えよう。

石井敦氏は，この点について，「図書館の建物ではなくサービス組織であるということは，別の言い方をすれば，市民に資料を提供する働きそのものが図書館なのであり，図書館と他の類似の施設を区別するのは，ただこの点だけである」と述べている[1]。

図書館のこのような進展は，利用者の顔を大きく変える結果となった。不精ヒゲの生えた学生や，本をかかえ込んだ学者達だけでなく，サンダルをつっかけ買物篭をぶらさげた主婦や，Tシャツでボールとバットをかついだ子ども達

* 児童文化研究室

の集団がその扉を押開けるようになったのである。特にその子どもの利用者数はめざましく増加している[2)4)]。マッコルビンが児童図書館が必要なのは，「図書館が成人に欠くことのできないものであると同じ理由である」と述べ，子どもは本をむさぼり読むものであるし，経済力を持たない子どもにとって「必要とするだけの種類と量の図書を読もうとすると，年長の者より以上に，そういうよい図書館の存在をたよりにするわけである」と言っている[3)]。

近年，全体に対する児童の割合が，登録者数貸出冊数共に飛躍的に増加してきている[2)4)]。この事実は，上記の事を如実に物語っていると同時に，子どもにとって図書館というものが，いかに必要とされているかを明らかにしている。

本研究は，このような社会状況の中にあって，実際に子ども達が，どのように図書館をとらえ，何を求めて図書館に来るのかを明らかにし，それと共に，それに対応する図書館の姿勢や図書館の活動について考えることを目的としている。

第Ⅰ節では，アンケートを基に具体的な図書館とそこに来る子どもの意識との関連性をとらえ，第Ⅱ節では，児童図書館のあるべき姿について考察したい。その上で今後の研究課題を明示する。

第Ⅰ節　子どもの意識調査

研究方法

質問紙調査法をとり，児童図書館に来館した小学校3年生から中学校3年生までの児童生徒に調査用紙を配布し，帰館の際に回収した。

調査図書館および期間については次にあげる。

○杉並区立柿木図書館（東京）S51.7.25～7.31
○品川区立源氏前図書館（東京）S51.8.17～8.22
○木更津市立図書館（千葉県）S51.8.25～8.29
（以上　6日間）
○盛岡市立図書館（岩手県）S52.8.8～8.10
（2.5日間）
○岩手県立図書館（岩手県）S52.8.9～8.21
（10日間）

表1と表2，表3は，調査対象一覧，および，調査図書館における基礎資料一覧である。調査

表1　調査対象一覧

	杉並区立柿木			品川区立源氏前			木更津市立			盛岡市立			岩手県立			学年別合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
小 3	36	44	80	36	59	95	17	28	45	3	7	10	2	12	14	94	151	245
小 4	42	46	88	23	50	73	21	21	42	4	6	10	9	15	24	99	138	237
小 5	41	26	67	59	48	107	35	33	68	5	5	10	12	18	30	152	130	282
小 6	43	50	93	44	51	95	30	43	73	4	10	14	11	26	37	132	180	312
中 1	38	34	72	31	46	77	37	56	93	8	8	16	8	19	27	122	163	285
中 2	23	30	53	18	42	60	12	20	32	2	18	20	3	6	9	58	116	174
中 3	1	5	6	19	25	44	10	18	28	1	7	8	0	3	3	31	58	89
合計	459			551			381			88			144			1623		
調査日数	6			6			6			2.5			10					
1日平均	76.5			91.8			63.5			35.2			14.4					

表2　図書館ごと奉仕実態

	杉並区立柿木	品川区立源氏前	木更津市立	盛岡市立	岩手県立
貸出冊数（1人）	5冊以内	4冊以内	2冊以内	3冊以内	1　冊
貸出期間	15日間（さらに1週間）	2週間	2週間	2週間	1週間
開館時間	月～土4時間 日　8時間	月～土10時間 日　8時間	水～日7時間半 日　3時間	月～金8時間 土・日7時間	（4～9月）3時間半 （10～3月）3時間 第1，3日曜，夏休み　6時間
休館曜日	水	月	火・月（午後）	日・月	日・月
休館日数（1カ月当り）	5～6日 日祝日，年末年始全館，(区)共通の休館日	5～6日 祝日，年末年始特別整理期間	7～8日 祝祭日，年末年始特別整理期間	5～6日 祝祭日，年末年始	5～6日 祝日，年末年始
児童空席数	36席	140席	—	100席	60席
児童室における催物	火・紙芝居 土・お話 科学の実験	木・おはなし会 日・映画会 不定期，子ども会・観察 月1回，手づくりおもちゃの会	な　し	月2回 おはなし会	な　し

表3　図書館ごと奉仕状況

	奉仕人口	職員（児）	蔵書数（児）	登録者数（児）	年間貸出冊数（児）
柿　木	530千人	13（2）人	37,343（6,934）	5,357（3,098）	117,709（69,011）
源氏前	387＊	9（3）＊	23,369（12,710）＊	4,504（3,632）＊	91,443（60,890）＊
木更津	93	6（0）	37,684（2,300）	1,712（845）	19,336（10,050）
盛岡市立	209	11（1）	51,160（11,490）	5,794（3,793）	48,608（34,027）
岩手県立	1,400	24（0）	180,902（4,359）	13,552（808）	23,736（4,355）

（　）内は，児童室関係　　＊源氏前は1976年のデータ

対象図書館の柿木と源氏前は，東京都立日比谷図書館より，東京都内で最も児童奉仕に力を入れている図書館という事で紹介されたものである。源氏前は，蔵書冊数，登録者数から見ても，児童図書館といってよい。また，木更津市立は，東京近郊都市の図書館という事で対象とし，盛岡市立および岩手県立は，地方中小都市の図書館ということで対象図書館とした。

結果と考察

表5は子どもたちが図書館に来るのに，どの位の時間をかけて来ているのかを，東京の2館と，木更津，盛岡の3館に分けてプロフィルを描いたものである。

表5を見ると，東京の2館と地方の3館とに明らかな違いが見られる。東京では，子ども達の$^2/_3$は徒歩で15分以内の所から来ているが，地方では，20分から30分かけて来る子どもがかなりいる事を示している。また，東京では30分以上かけて来ている子どもはほとんどいないが，地方では20％ほどの子どもが30分から60分かけ

て来ている。しかし，地方でも60分以上となると，ほとんど見られなくなる。

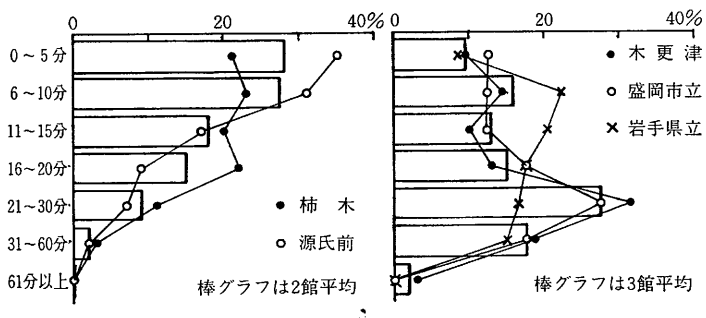
一方，杉並区と品川区，木更津市および盛岡市にある公立図書館数を調べてみたのが表4である。これらのことからわかることは，東京では，人口密度は別にして，児童図書館の数が多く，どの子どもも30分以内でどこかの図書館に行くことができる。しかし木更津市や盛岡市では，図書館の数が少ないので，図書館に来たいと思う子ども達はかなり遠くから来ざるを得ない。図書館に来たいと思う子どもは，かなり時間をかけても来ているが，しかし1時間以上かかる場合は，やはり無理のようである。

表4　公共図書館数

杉並区	5
品川区	6
木更津市	1
盛岡市	2

表6は，図書館に来たきっかけを項目ごとの割合で示したグラフである。

表5　図書館までの時間



回答は，「誰といっしょに来たか」という状況と「何しに来たか」という目的とに分かれた。状況については，どの館についてもどの学年についても「友人」と答えた者が最も多く40.2%で，ついで「親」(8.9%)「兄弟」(8.1%)「その他」(11.3%)となっている。「友人」の答が地域別，年令別，性別にかかわらずトップをしめている事実は，読書というものが図書と子ども1人1人との結びつきというまったく個人的なものであるにもかかわらず，図書館に来て本を選ぶという行為が「子供集団」を無視しては論じられない事を示している。

また，源氏前が他の館に比べて，割に先生，図書館のチラシなどがきっかけになったと答えている子どもが多い。これは，図書館側からの学校や地域への働きかけの結果と思われる。その他の図書館での回答に，図書館自身のアッピールや，学校の教員によるということが，ほとんどあげられていないという事実については，図書館と学校との連携ということや，図書館と地域の結びつきの大切さを考えると，今後の大きな問題として考えていかなければなるまい。

今一つの目的について回答したものには，「本を読みに，本を借りに」という答が最も多い点は，図書館の役割，機能から言っても当然と言えよう。「宿題を調べに」「勉強しに」という答が高学年や中学生に増えている点も見逃せない。むろん，図書館は，わからない事や疑問の事柄を調べる資料館としての役割を持つものであるが，本来学校の宿題程度の疑問は，学校図書館で解決されるべきものではあるまいか。又，図書館が図書を供給するシステムであるとすれば，勉強するための部屋というイメージは捨て去らなければならないし，勉強する場がない子ども達が沢山いるのであれば，勉強室は他の場所が求められるべきであろう。

表6　図書館に来たきっかけ

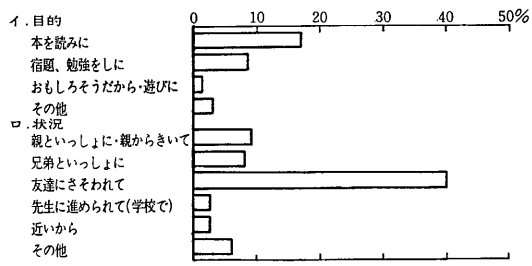


表7は，最初に図書館に来た年令と，図書館に来たきっかけの割合をグラフに表わしたもの

である。明らかに，年令の低い段階では，きっかけを親が造り，小学校に入ると友達が増加し，小学校3，4年でピークに達する。中学生になると，親・兄弟・友人よりも他の要因がきっかけとして増えて来ることがわかる。これらの事から考えると，小さい頃，親や姉，兄に連れて行ってもらい，図書館の常連となった子どもは，今度は小学校2，3年になるとその子どもが，まわりの子ども達を引き連れて，図書館通いを始める，という図式が成り立つ。

表7　きっかけと始めて来た年令

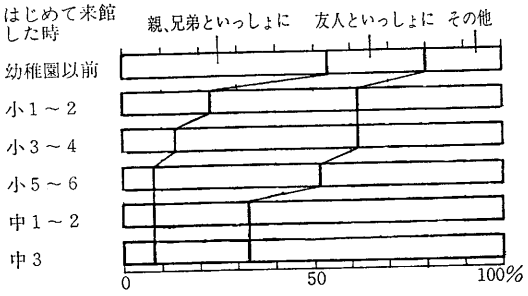


表8は，子どもが，図書館に1週間のうち何日来ているかを示したものである。表9aは，子どもが図書館にだいたいいつもどの位の時間いるかという事を，図書館ごとに示したものである。また表9bは同じデーターを基に学年別に示したものである。

この2つの表から，図書館に来ている子どもの50%以上が週1～2回図書館に来，そして1時間か2時間いるということがわかる。

源氏前では，週3回以上と答えた子どもが27%おり，図書館に2時間ぐらいいると答えた子どもが32%と最も多くなっている。この事実と表2を比較すると，源氏前では，貸出サービスの他に週1回づつの“お話し会”と“映画会”を持ち，月1回の“手造りおもちゃの会”そして不定期に“子ども会”“観察”など多くの「子供を集団で本の世界へいざなう活動[3]」と積極的にとり組んでいる。その姿勢が，子ども達の上に明確にあらわれて来ている。

また表9bから，年令が高くなるほど，図書館で過ごす時間も長くなっている事がわかる。

表10は，なぜ図書館に来るのですか，という問に対して，8個の選択肢を用意し，あてはまると思うもの（複数）に○印をつけさせたものの結果である。

「イ．読みたい本があるから」と答えた子どもが65%で1位にあり，2位が「ク．資料を集めに」(24.7%）である。このことは，調査期間が夏休みであった事も加わって「ク」が多くなったことも考えられるが，子どもにとっての図書館が依然として，わからない事物を調べたり，資料を集めたりする場である事を示している。「オ．かりやすいから」の項目を比較してみると興味深い。貸出冊数が多く貸出期間も長い（表2）柿木や源氏前では，20%以上の高い

表8　1週間に何回来るか

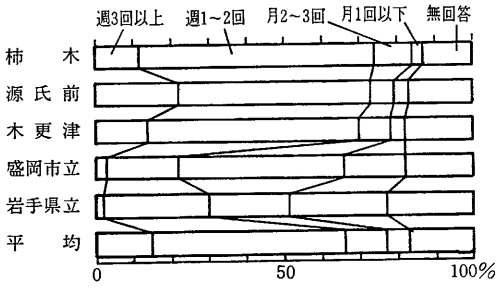


表9ab　図書館で過ごす時間

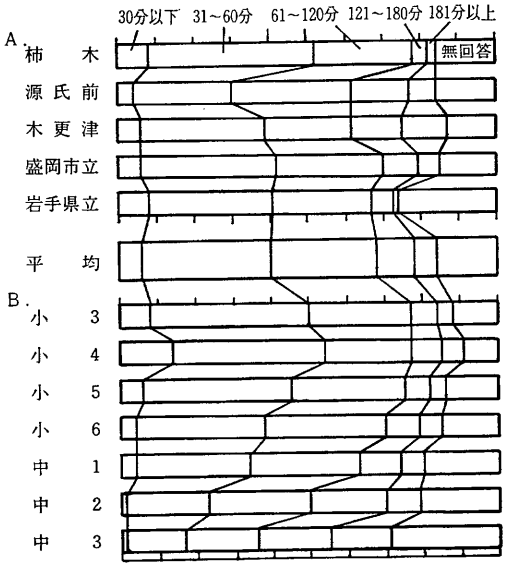


表10　図書館に来る理由

	柿　木	源氏前	木更津	盛岡市立	岩手県立	合　計
ア，友だちに会えるから	7(1.5)	41 (7.4)	13 (3.4)	3 (3.4)	2*(1.4)	66 (4.1)
イ，読みたい本があるから	338 (73.6)	325 (59.0)	249 (65.4)	50*(56.8)	92 (63.9)	1054 (64.9)
ウ，遊びに来るから	10 (2.2)	41 (7.4)	4 (1.0)	4 (4.5)	1*(0.7)	60 (3.7)
エ，楽しいから	51 (11.1)	94 (17.1)	40*(10.5)	24 (27.3)	25 (17.4)	234 (14.4)
オ，借りやすいから	102 (22.2)	117 (21.2)	57 (15.0)	13 (14.8)	14*(9.7)	303 (18.7)
カ，先生，家の人にさそわれて	17*(3.7)	33 (6.0)	20 (5.2)	5 (5.7)	15 (10.4)	90 (5.5)
キ，友だちにさそわれて	83 (18.1)	142 (25.8)	66 (17.3)	25 (28.4)	14*(9.7)	330 (20.3)
ク，資料をあつめに	109 (23.7)	145 (26.3)	92 (24.1)	29 (33.0)	26*(18.1)	401 (24.7)
ケ，その他	34 (7.4)	82 (14.9)	35 (9.2)	16 (18.2)	7*(4.9)	174 (10.7)
調　査　人　数	459	551	381	88	144	1623

（　）内は調査人数に対する百分率。
——*印は，それぞれ，5館の比較で百分率が最大のものと最小のもの。

値を示し，貸出冊数が少なく，貸出期間も短い（表2）岩手県立では，9.7%と最も低い値を示している。貸出サービスに象徴される図書館奉仕の体制を子どもは敏感に感じとっていると思われる。また「カ．先生家の人にさそわれて」の項を見ると，「オ」とは全く逆に，岩手県立が最も高い値を示し（10.4%），柿木が最も低い値（3.7%）を示している事も興味深い。

上記の事実は，図書館の子どもに対するサービスの姿勢が，子どもの意識と密接に関連していることを示している。

自由記述で書いた図書館への希望の回答は大別すると，本を入れてほしいというリクエストと，図書館業務に関する答とに分けられた。リクエストには，マンガを入れてほしいという声が多数あり，図書館としてはどこまで図書として受入れるかという問題をかかえていると言えよう。業務に関するものには，貸出期間を長く，休館日を少なく，貸出冊数をふやしてほしいという声が大分あり，また開館時間をもっと長くなど具体的な直接図書館の運営にかかわって来るような要求があげられていた。

まとめ

アンケート結果から，次の3点が特に注目される。

(1) 表1，2について，各児童図書館（室）を比較した結果，児童奉仕部門での図書館相互の格差が，質的な面，量的な面で非常に大きいことが明らかになった。東京都では，ほとんどの子どもが30分以内にどこかの図書館に行けるというめぐまれた状況にあり，子ども達は図書館に足を運ぶ結果となっている。又一方地方都市では，1つの市が1館あるいは2館しか図書館を持たず，子ども達は1時間もかけて図書館に来るという実状である。地方都市の場合，図書館の常連となって日常的に本を借りたり返したりする子どもは，めぐまれたほんの一握りの子どもたちにしかすぎないのである。

(2) 子どもたちが図書館を知るきっかけは，年令が低い段階では，親や兄弟にさそわれて来る事が多く，小学校に入ると友達同志でさそい合って来る事が多くなっている。

このことは，図書館側が，子ども集団との対応を重視すべき事と考え，家庭・学校・地域社会と連携していくことによってはじめて可能と言える。

(3) 児童図書館のサービスの差が，子ども達の利用状況に大きく関連していることがわかった。子ども達の図書館に対するイメージが実際に与えられるサービスの質と量とによって決定づけられている事実は，重要な問題を提起していると言えよう。

次節においては，以上の結論を基に，児童図書館の課題を議論する。

第Ⅱ節　児童図書館の役割

児童図書館は，子どもにとって未知の世界や新しい知識のいっぱいつまった館である。子どもはその中で，経験したことがないような冒険や人生の喜びや悲しみと本によって出会い，自分の世界を広げて行く。また子どもの読書は，実際の生活とは切り離しては考えられない。子どもは本を読んでいる時には，主人公になりきってしまう。本は本の中の事だということを，知識としては持っているが，読んでいる最中は，主人公といっしょに泣いたり笑ったり，ドキドキしたりして読み進む。好きな本になると，何度も読み返したり，いつでも離さずに持って歩いたりする。そういった心の広がりを遊びの中へ返してやる事も重要である。

児童図書館が主に対象とする児童は，幼児から中学生である。そして「子どもと本とを結びつけ，子どもに本を提供するところ[6]」である。子どもと本とを結びつけ本を提供するためになされる仕事は次のようなものである。

(1) 図書の貸出（事務及びレファレンス）
(2) 図書の選択と購入
(3) 本の紹介
- 新刊本の展示，紹介
- ストーリー・テーリング
- ブック・トーク
- 人形劇・映画会・その他

(4) 図書の資料としての保存

児童図書館では，本好きで本を借りに来る子どもだけを待っているだけではなく，積極的に外に出て行き子ども達に本の楽しみを教える図書館でありたい。「来たい人だけが来る図書館から，人々の中へ出て行ってサービスする図書館へ[7]」でなければならないのである。

子どもの読書は，遊びと密接にかかわりながら，児童図書館以外のところでも行なわれる。子どもの読書生活全体を考えて行く場合，それをどのようにとらえ協力し合うかという事は大切である。特に，それらの中で，子どもの読書活動に奉仕している，学校図書館，地域家庭文庫，児童館との連携を深めることは重要である。公立図書館は，その公的立場から，第1に専門家がそのサービスに携わることができる事，第2に公費で運営できる事，第3に学校の教育課程にかかわりなく自由に子どもの読書を広げられる事，第4に組織的に子どもの図書や読書について研究できる事，の4つの点で他の組織・機関をささえて行くべき立場にある事を示している。

(1) 学校図書館との連携

今回のアンケート調査において，どうして本を読むのですか，という問に対して，「勉強になるから」「字を覚えるから」「読書感想文を書くために」「主題を考えながら読む」のような回答が少数ではなく存在した事実は，学校での読書指導の状況を明確に示している。むろん学校図書館は，「学校の教育課程展開のための図書館[8]」であるが，一方では「読書指導や感想文よりも読書の楽しさに目を開かせてほしい[9]」のである。

すべての子ども達をとらえることのできる小中学校こそ，1人のもれもなく子ども達へ読書の楽しみを見出させ得る場なのである。その上でより多くのより深い読書へと発展させる場としての児童図書館へと道はつながるのである。そのために児童図書館員は，学校図書館司書や教師たちとのコミュケーションを，より緊密にする必要がある。

(2) 家庭文庫，地域文庫への援助

文庫はその家庭的で暖かい雰囲気や，1人1人の子供へのきめの細かいサービスという点で児童図書館へ大きく影響を与えた。また図書館設立運動の核としての存在意義も大きい。

しかし，その経済的基盤の弱さ，人的，時間的制限，研究奉仕活動の不充分さ，などいろいろな限界性を持っている。その限界性を越えて人々の善意と奉仕にささえられて文庫は近年ますます増加しつつある[01]。

児童図書館は，その限界性を少しでも埋める役割をも担なっていると言える。図書の団体貸出のサービスを大幅に広げて，その冊数や運搬・読書指導などいろいろな点での援助が考えられよう。

(3) 児童館図書室との協力

児童館は，本来子どもの生活そのものにかかわって来る施設であり，遊びを中心とした子ども達のセンターである。このような児童館の図書室は，子どもへ読書の喜びを伝える最も適した環境にあると言える。又読書の後の大きくふくらんだ気持を，劇遊び，人形劇，など色々の遊びに発展させる場としても重要な拠点である。

児童館図書室は，1つの図書館の分室として考えて行くべきである。

まとめ

児童図書館の課題をまとめてみると次の2点があげられる。

(1) 児童図書館は，子どもと本とを結びつけるために，独特の活動をする。例えば，子どもが何を要求して図書館に来ているかをすばやくキャッチして図書を選ぶ手助けをしたり，調べる手伝いをしたりする。又，ストーリー・テーリング，ブック・トークなど子どもに本を紹介する事も重要な仕事である。本を読んだ後の活動を充分させる施設を備える事もしたい。そのためには，児童図書館員の立場は重要と言わねばならない。

(2) 上記のような事柄を，図書館の中だけではなく，外に出て子どもに働きかける必要がある。

○学校図書館とは連携を

○地域・家庭文庫には，積極的な援助を

○児童館とは相互協力を，と言えよう。

結　語

以上，第Ⅰ節，第Ⅱ節に亘って述べて来たが，本研究を基にして，以後次のような観点から研究を進めたい。

第1に児童図書館内の状況や問題をとり上げたい。本研究では，図書館内での要となる奉仕員の問題を論ずるまでに到らなかったが，実際に活動する上での司書の問題を子どもとのかかわり合いの中で，とらえる必要がある。

第2に今回は，子どもの表面的な意識を中心に考察したが，読書と深くかかわり合ったところでの子どもの意識の問題もとらえたい。

第3には，今回論じた，児童図書館のセンターとしての役割という視点から，実態を把握する必要がある。

註

1) 石井敦・前川恒雄：「図書館の発見」，日本放送出版協会 p. 72 (1976)

2) 児童図書館研究会編：「年報こどもの図書館」，日本図書館協会 p. 5 (1976)

3) ライオネル・R・マッコルビン，倉沢政雄・北村泰子訳：「児童のための図書館奉仕」，日本図書館協会 p. 2～p. 3 (1973)

4) 日本図書館協会：「図書館白書 1977」，日本図書館協会 p. 14 (1977)

5) 渡辺茂男：「月刊子どもの館」No. 9，福音館書店，p. 117 (1974)

6) 小河内芳子：「季刊子どもの本棚」No. 7 草土文化，p. 6 (1973)

7) 松岡享子：「図書」No. 298，岩波書店 p. (1974)

8) 石井敦・前川恒雄：「図書館の発見」，日本放送出版協会 p. 62 (1976)

9) 日本子どもの本研究会：「季刊子どもの本棚」No. 7，草土文化，

10) 日本子どもの本研究会：「季刊子どもの本棚」No. 19 草土文化 (1976)